

『八月の光』のジョー・クリスマス

池内正直

Light in August の生成に関する研究は、事柄の性質上完全なものは期待できないとは言え、R. Fadiman の画期的な本は様々の面白い成果を盛り込んで⁽¹⁾いる。その中でも、我々の関心を特に強く惹くことは、この作品が最初のうちは《Lena-Byron-Hightower》を中心人物にした構成になっていたという点であらう。⁽²⁾即ちこの段階では、Joe Christmas は主要人物として扱われていなかったのである。しかも彼は、“黒人の血が混った人物”として、噂の対象になっていたに過ぎない。⁽³⁾その後現行テキストの5章～12章にあたる個所が執筆されて組み込まれ、更にそれによる全体の再構成と修正の後に、出版されるに至ったのである。⁽⁴⁾この中間の8章が加えられたために、この作品の人種問題をはじめ、共同体の意味、疎外と孤立、南部のピューリタニズム、男と女の原理と葛藤、時間（過去）等々のテーマが、⁽⁵⁾にわかに深められることになったのである。

これら後から組み込まれた8章の中でも、一番最後に書かれた部分は、ジョー・クリスマスの17才の秋から1年半余に及ぶ、Bobbie Allen との出会いから別れに至る物語である。⁽⁶⁾この後クリスマスは15年間の放浪の果てに、33才の年で Jefferson の町にやって来て、37才（ないしは38才）で殺害されるのである。十何年か前の研究書の中には、彼の死んだ時の年令を、イエス・キリストと同じ33才としているものがあつた。また恐らく作者の計算の中にも、その

意図はあったであろう。クリスマスのフラッシュバックの記述が、悪童たちに誘われて黒人少女を小屋に連れ込んだ、15才の時の出来事で終わっていて、ボビー・アレンのエピソードが付け加えられなければ、よかったのだから。そして事実、初期の草稿の一部には、クリスマスがジェファスンの町に着いた時の年齢を30才としているところもあるという⁽⁷⁾。

では、かねがね作中人物の Ars Moriendi にこだわったり、キリストの物語のパターンを利用することを好んだ作者が⁽⁸⁾、その様式の踏襲を犠牲にしてまで付加せざるを得なかった、ボビーのエピソードとは、どんな意味をもつものなのだろう。あるいはまた、この第7章から第10章に渡って60ページに及ぶエピソードが（因みに、Joanna Burden との出会いから殺害に至るまでのフラッシュバックの長さは、55ページである）、一体その直後からの15年間の放浪の年月については、同じテキストでたった2ページ半しか割いていないという事実を、十分にカバーするほどの大きな意味があるのだろうか。

(1)

このエピソードの経過の詳細については、H. Hungerford の論文に要領よくまとめられているが⁽⁹⁾、二人は17才の秋に出会い、その半年後に恋愛関係に入り、その一年余り後に養父 McEachern に見責められて彼を殺し、それをきっかけに二人の別れが訪れるのである。ハンガーフォードも述べているとおり、個々のエピソードの時期を正確に特定できないところも少なくないが、これは作者が（時間の詳細などよりも）それぞれの出来事がクリスマスに及ぼした影響そのものの方を重要視しているために他ならない。この時期にクリスマスが出会った事柄の中から、彼の生涯に影響を及ぼしたと思われる幾つかの決定的な体験を検討してみよう。

先ず養父母との関係から見ていくと、(1)背丈が父と同じ高さに達した18才のクリスマスは⁽¹⁰⁾、親の命令に従わないばかりか（それだけなら5才の時から彼に具わった態度だった）、父親の言葉や訓えに対する裏切り行為をする（町のレストラン〔ボビーの働らいている店〕へ行くこと、仔牛を売ってしまうこと）。

(2)嘘をつく (この行為も以前からあったことかもしれないが、ここで初めて明示されている [154])。 (3)父の殴打を躲す (それまでは、受け身一方であった [154])。一方、養母との係わりにおいては、 (4)彼女および女性全般の持つ、「永遠にその犠牲になる運命にある、そして男の堅い非情な正義よりも強い嫌悪感を抱かせる、柔弱な親切 (158)」を憎み、この養母をはっきりと言葉に出して、「敵 (194)」と見なすようになる。

「この日大人になった (137)」とクリスマスが思い出すのは、彼が8才の年で、父親に教義問答書の暗誦を強いられたが、一言一句たりとも暗記しようとしなかった日のことである。この「大人になる」とは、その時の反抗と、(養母が秘かに持ってきてくれた夕食を心ならずも口に運んだという)屈辱の体験を、指しているのであろう。ファディマンの研究によると、クリスマスが大人になったと述べている個所は、原稿の段階では (仔羊を殺してその血に手を浸す処を含めて)、5回あったらしい⁽¹¹⁾。ところがテキストでは、先の個所と、18才になった彼が父親の暴力を躲わすところだけになっている。確かに、クリスマスが親を超えることができるようになったこの時こそ、実際に大人になる下地ができたと言ってよい。しかし、人が本当に大人になるというのは、異性との出会いによってもたらされるものだろう。「男は二度生まれる。一度めは母親から、二度めは恋する女を通して」というルソーの言葉は、この辺の事情を物語るものだろう。クリスマスの場合も、先に挙げた幾つかの、親を超えて大人になっていくことを示す事実と前後して、というよりむしろ実はそれらの事実⁽¹¹⁾に先だって、女との出会いがあったのである。

クリスマスとボビーの恋愛は、一見したところ、どこにでも見られる若い男女の恋の有様と変るところがない。ただ何事であれ、それぞれの“コンテキスト”や“関係”によって、また特殊な色調を帯びるようになるものだ。クリスマスのように孤独で頑固な心を持った少年にとっては、ボビーとの出会いは、特別の意味があった。つまり、生まれて初めて、愛というものを知ることができたのである。再びファディマンによれば、二人の恋の経過を語る個所で、「18才は愛と性を混同する時期だ」と一度書いたけれども、後に削除されてい

⁽¹²⁾るといふ。このことは、作者も、クリスマスの愛を、性欲に発したのではなく、全精神を賭けた本物の恋にしたかったことを、暗示するものではないだろうか。R. D. Parker という（今一番人気のあるネオ・ハードボイルド作家と間違いそうな名前を持った）研究者も、クリスマスの手がボビーの脇のあたりに触れて（作者はこのことに7回も言及しているという）、満ち足りた気持ちを感じている場面などに見られる甘美さを指摘して、この時クリスマスの経験した本物の愛が、彼の生涯においては、例外的なものであると説いている。⁽¹³⁾

しかし彼女は決して美貌や女性的妖艶の持ち主ではない。「男の名 (168)」とカン違いするような名前を持ち、「髪は黒く顔は骨ばっていつも下を向いてしかも少しズレて、首の骨に据え付けられていて、目はボタンでできたヌイグルミの動物のもののように (161)」、異常に大きな手を持っている (168)。こういった具合に、（他の登場人物、たとえばハイタワーやマッケハンなどと同様に）カリカチュア化されて描かれるような女なのだ。そんな彼女のもとに、クリスマスは週に2回、片道5マイルの夜半の道を通い始めるのである。彼女にプレゼントを贈るために（「古くなってハエのフンの付いた箱に入ったアメ (179)」といった風に、ここでも戯画化されている）、養母の金を盗んだり、木を伐るアルバイトまで始める。こうして、二人の恋がひたすらさを増せば増すほど、読者の目から見て滑稽さが増していくという趣向になっている。

二人の恋が始まって2ヶ月め頃には、情熱がクライマックスに達する。それを最もよく示すものは、クリスマスが口にすべきではない言葉、即ち「自分の軀の中に黒んぼの血が混っているかもしれない (184)」という重大な事柄を、打ち明けているという一点である。*Light in August* や “Dry September” の南部の社会に見られるとおり、黒人の男が白人の女に触れることは、最大の禁忌である。白人にあらざれば人間にあらざで、黒人に対して「公平（な裁判所）などクソくらえ (336)」という社会なのだ。クリスマスの情熱は、その禁忌にさえ挑戦する程のものであり、事実この時の二人には、それを超える程の情熱恋愛があったのである。Max Confrey が二人のことを、「ロメオとジュリエットだ (180)」と当てこすっているが、皮肉なことにその言葉は二重の意

味で当たっている。一つは、今言った禁忌に触れた恋であり、もう一つは、遠い田舎に住む無知な若者と町に住む売春婦の、金銭を介さぬ恋という意味で、ビジネスのルールを犯しているからだ。恋の絶頂はその後もしばらく（少なくとも2週間と、その後の曖昧な期間）続く。

陶酔からの目覚めは、クリスマスがボビーの娼婦であるという実態を知り、「彼女に毒づきながら、殴りながら泣く（186）」時にやってくる。一般的に「西欧人の男は、小説の中では泣かないそうである⁽¹⁵⁾」が、クリスマスの悲しみは、そのような慣例を破るほどに、深いものだったに違いない。事実、「彼はそれまでに泣いた記憶は一回もなかった（186）」のだから。その2週間後、タバコを喫い始め、酒も呑み始めたということも、そしてまた酔っ払ったあげく、彼女のことを「おれの情婦（187）」呼ばわりするあたりも、天国から地獄へ落ちたクリスマスの姿を示すものだろう。

こうしてクリスマスは、父マッケハンの言うところの、罪のワンセットともいう、「汚れ、忘恩、不従順、瀆神；嘘、色欲；売春（154）」をひとつおりのマスターするのである。これは一種の成人儀式であり、プロテスタントの見地からすれば幸運な墮落とも言えるかもしれない。しかし彼が本当の意味で楽園を追放されるのは、むしろ親殺しをした直後にボビーに裏切られる時のことである。クリスマスにしてみれば、「彼女のために殺人さえもした（204）」はずだったのだが、警察に関わることを恐れるボビーは、彼を見捨てて逃げていく。しかも「あいつは黒んぼだって自分から打ち明けたんよ。あのスケベ野郎が。黒んぼのくせにあたいをロハでやりやがって…（205）」といった調子で、クリスマスの秘密を暴露して、彼を二重に裏切って去るのである。

これをクリスマスの側から見れば、三重にも達する喪失の体験なのだ。先ず愛の喪失。これだけでも、青年にとっては世界の崩壊に等しい。一人の人間を完全に打ちのめすことができる。しかし、これだけならまだいい。「恋の相手から欺かれるのは、同じ相手から恋を覚まされるほど、不幸でないことがある」し、「恋を失うことほど深く、しかも短い期間人を悲しませるものはない」（いずれも、ラ・ロシュフコウ）からだ。

実は、それよりももっと深刻なことは、「彼女のために殺った (204)」はずの親殺しが、何の意味もなかったということだ。いや意味がないどころか、そのために、クリスマスは追われる身に、そして社会から追放される身になったのである。そして更に一層決定的な衝撃は、ボビーから黒人と呼称されたことだ。これは言うまでもなく、白人社会からの追放である。それでいて、その容貌のゆえに黒人社会にも受け容れられないのだ。彼の帰属すべき場所はどこにもなくなってしまふ。白人なのか黒人なのか、彼は改めて、正解の決して得られない問題を抱えて、逃亡者にならねばならないのだ。こうして、ボビーとの別れのもたらした、三重の喪失あるいは追放の結果、クリスマスはそれから15年後、ジョアンナ・バーデンに出会い、やがて彼女を殺してリンチを受けるまで、長い放浪の年月を過ごすことになるのである。

(2)

先に、この本の作者はクリスマスの15年間という長きに渡り、全米各地に及ぶ空間的にも大きな放浪を、たった3ページ弱で片付けていると述べた。しかし、この年月のクリスマスの絶望の大きさは、実は割かれたページ数の割合に逆比例して、読まれねばならないのではないだろうか。なぜなら、感情の度合が強ければ強い程、それは言葉にはなり得ないものであろうし、言葉にしたところで詮じにしかならないだろうから。実際、先のクリスマスがボビーに捨てられたシーンでも、クリスマスの二重、三重の喪失感については、一言も語られていないのである。そこで述べられることと言えば、ボビーの仲間の男に殴り倒されたクリスマスの、朦朧とした意識の中に切れ切れに聞こえてくる、彼女達の会話のやりとりや、ぼんやりと目に映る人々の姿だけである。みんな立ち去った後も、クリスマスの心情に関しての描写は一切なく、ただよろめきながら――

彼は暗いポーチを通過して、血のくっついたままの顔で月光の中へ出てきた。すきっ腹にウィスキーが効いて熱く、獐猛で大胆になった彼は、その

そして、この3ページ後には、殆ど唐突に、「彼は33才になっていた (213)」のである。

このことは、H. M. Ruppensburg 論ずるところの、(幾種類かに分けられた語りのタイプの中の)《内面が解釈された語り》(というタイプ)が、クリスマスのところでは殆んど使われていないということなのである。⁽¹⁶⁾この研究者は、その点に触れて、「クリスマスの疎外感とミステリー性を高めるもの」であると述べているが、⁽¹⁷⁾さらにもう一項目付け加えるべきだったであろう。即ち、前言を繰り返すことになるが、彼の内面を示す語りが少ないのは、ボビーの喪失のシーンに端的に示されたとおりに、その絶望の深さが、語りの可能性をも奪う程に大きいことを示唆するものであるからだ。少し言い方を変えると、A. Kinney も述べていることだが、人は自分に見えるものだけを、自分の期待に合わせて見ようとするものだが、⁽¹⁸⁾クリスマスの疎外感と喪失感、月並みの語り手には見透すことのできないくらい大きいものだったと考えてよいのだ。⁽¹⁹⁾とすれば、先にクリスマスの成人儀式に触れて、樂園喪失と言ったのは当たらないだろう。樂園を追われた人間は、実は“脱出”という幸運を得たはずなのに、クリスマスの追放は、言語に絶する無限地獄に墮ちることにほかならなかったのだから。

再びファディマンの研究によれば、テキスト段階では削除された一節に、「クリスマスはボビーから、愛、裏切り、絶望を学んだ」という文章があった⁽²⁰⁾という。実際上述のとおり、クリスマスはボビーとの出会いによって、恋愛という人生における至福を経験することができた。(もっとも、いささか皮肉の込められた描写は、恋愛の幸福が一過性のものでしかないことを予言しているようではあるが)そしてやがて、彼女の裏切りと絶望は、前述したとおりである。フォークナーは、テキストには直接的な言及は避けることによって、そして草稿に認められる一節が示すことによって、クリスマスの被った裏切りと失望が、それ以前に享受した愛と同じくらい深く大きな意味を持っていること

を、如実に示しているのである。

クリスマスの15年間の放浪は、18才の時に受けた言わく言いがたい三重の絶望の延長上にあった。ハード・ボイルド小説の凶悪犯などがよく逃げ込んでいくメキシコまで流れて行ったり、シカゴやデトロイトといった、当時の光と闇の対照の最も鮮やかな（ホーボアの）都市にさ迷い込んだのも、実は彼の喪失感を物語るものと読んでいいだろう。あるいはまた、語り手は何の説明も解釈も加えていないが、彼が再び南部へ戻って来たのも、大地や血が呼び寄せたものだろうし、その間に白人の女にも黒人の女にも、安らぎを求めはしたものの、それも詮得られなかったという事実も、クリスマスの迷妄の深さを語るものに他ならない。

こうしてみると、ジョー・クリスマスのボビー体験は、彼の記憶に残っている他の幾つかの経験などは比類にならない程に重大なものであることが、改めてよくわかるのだ。彼の記憶に残るものは、殆ど女性が絡むものだが、それらの中では Alice との短な幸福な巡り合いを除いて、殆ど全てが忌わしいものになっている。5才の時の栄養士、15才の時の黒人娘、ボビーとの初めてのデート等は、どれも嘔吐の記憶と不可分のものだ。また彼女らの気まぐれや不規則性を共有する養母も、秘密と悪の匂いを秘めた敵である。これらすべての出会いそしてそれへの反発が、後年のクリスマスの行動、特に「黒人、肉体、女、汚れ、動物としての肉体」を忌避する性向を決定しているゆえに、各々が重要なものと解されている⁽²¹⁾。中でも栄養士との出会いを、決定的なもの⁽²¹⁾と捉える向きは少なくない。しかし、これらの体験の怖ろしさは、たとえ嘔吐を伴うにせよ、まだ言葉で表現できる類いのものである。その分だけ、ボビー体験よりも比重の軽いものだったのである。

(3)

ジョアンナ・バーデンとの出会いは、クリスマスの15年の追放の延長の上にある。ということは、その前の三重の喪失と疎外の延長線上にあると言ってもよい。クリスマスの女性嫌悪、殺人に対するオブセッション、自分の黒人の血

に対する懐疑などを抱いて過した年月が、彼の心に濃い影を落しているのだ。こういった過去を持った33才の男でも、普通なら40才という年齢の女性との出会いにおいて、格別なことが起ることはあるまい。⁽¹⁰⁾“Dry September”のMiss Minnieも未婚の40才位の婦人だが、その頃の町の男たちの考えによれば、男心をそそるような年齢ではないからだ。(今日の年齢の感覚とはいささかズレがあると考えてよい)しかし、前述のとおり、一見何事も起りそうもない組み合わせでも、双方の関係のありようによっては、様々な模様を織りなすこともあるものだ。実際、偶々人並み以上に複雑なコンテクストを持ったこのミス・バーデンと、クリスマスという深い傷を抱いた男との関係においては、何らかの事件が起ってしまうのだ。そもそもバーデンは、クリスマスが数多くの絶望を味わされてきた人類の半分、即ち女たちの一人である。一方また彼が憎悪する宗教的狂信を、Doc Hines やマッケハンと共有する女でもある。R. B. Parkerの書く私立探偵 Spencerの言い方を借りれば、「狂信者は常に手強い。狂信が…人を大胆、無欲、非情にし、怪物にしてしまうのだ」⁽²³⁾が、このハインズにもマッケハンに当てはまる言葉が、そのままミス・バーデンにも当てはまるのだ。そして彼女の抱懐する、黒人へのオブセッション――

ジョアンナと織りなす3年余りの絵模様は、先ず「恋する女の諸相 (244)」を目の前にして、「下水溝に落ち込んでしまったようで (242)」、「底なし沼に吸い込まれそうになっている男のよう (246)」な姿から始まる。クリスマスにとって女性とは《暗黒、闇、危険、肉軀、多産、柔弱、陰湿、温かみ、血、抑制、秘密、暗い官能》⁽²⁴⁾といったものであったが、バーデンは女の持つそれらすべてを総合したものと言えるような存在である。それだけならまだいい。実際彼女が結婚を望んでいることを察した彼は、《内部の語り》⁽²⁵⁾で、「今譲ってしまえば、今までやってきた30年をまるっきり否定することになる (250)」と表現する余裕があるのだから。ジョアンナ・バーデンの次の手は、クリスマスを黒人のパターンに仕立てあげることだ。これに対しては、クリスマスはただ暴言と暴力で応えることができるだけだ。バーデンの最後の搦め手は「神に話しかけなくてもいい、先ず跪ずきなさい (265)」という誘いである。神なるものも、

子供の頃のクリスマスにとっては、休日、音楽、心地よい言葉を連想させる響きのよい単語だった (135)。マッケハンによって、神に対する恐れを呼び込まれるまでは。が、バーデンのこの要求を前にしたクリスマスについては、《内面が解釈された語り》なるものは、一切なされていない。ただ《内部の語り》によって、「俺はああせざるを得なかった……。そしてその時がきた (265, 266)」と書かれているだけだ。バーデンの殺害の有様の凄じさは、別のページでグロテスクなユーモア振りをもって描かれているのだが (85)、そこでもクリスマスの内面の凄じい暗黒振りについては、何も語られていない。ということは、この時も、実は語りの表現が及ばない程凄絶なドラマが、演じられているということなのだろう。

この後のクリスマスを待っているものは、8日間の逃亡生活とその2日後のリンチによる死でしかない。⁽²⁶⁾ 一体この人物の38年の人生とは、⁽²⁷⁾ 何だったのか。孤児として生まれ、18才の頃の初めての本物の愛にも破れ、結果として三重に裏切られ、三重の意味で終わってしまった人生は、結局虚妄のうちに終わってしまう。先に見たとおり、バーデンとの出会いも、彼の人生の色調をますます暗いものにしただけだ。マイナスとマイナスが交わってプラスになるという僥倖は、ついにクリスマスの上には訪れなかったのだ。

が、しばしば指摘されるように、クリスマスの殺害のシーンだけは、ほのかに明るい光がさしている。彼は「安らかで測り難く耐え難いまなざしで (440)」見上げているし、「黒い血は解放された吐息のようで……その噴出する黒い血に乗って男は人々の永遠の記憶の中に、飛翔していくようだった (440)」とあるから。また彼の最期の姿は「穏やかで……勝ち誇っていた (440)」と語られているからだ。これを文字通り受け取って、「クリスマスが黒人の殺人鬼でも、ジョー・クリスマスでもなく、普遍的な人間に昇華し得たのだ」とか、「犠牲の羊となって、全てから自由になったのだ」というのが、よくなされる読み方である。⁽²⁸⁾ たしかに彼の名前や幾多のキリストとの類似に見られるもの、あるいは最後の逃亡の日々や死を迎えるシーンに見られる儀式的な投げかけ方などに⁽²⁹⁾ は、豊饒や再生のイメージを喚起するものが無くはないのは事実である。

しかし、それにしても、この場面に至って初めて、クリスマスの救済を語るなどとは、いささか唐突ではないだろうか。クリスマスの生は、殺される直前まで真暗らだったのだから。では、最後の場面の明るさはどう解釈すればいいのだろうか。“語り”のことに関連して、先に Kinney の言葉を引用して、次のように前述した。即ち、「人は自分の見たいものだけを、期待しているとおりに見るものだ」と。クリスマスの最後の場面も、この概念を適用すべきではないだろうか。つまり、クリスマスの「安らかなまなざし」を見たのは、語り手の心の反映であり、彼の死に勝利を見ようとしたのも、クリスマスの姿を描き出している語り手の思い入れにすぎないのだと。そして、実際のクリスマスは、救済などされていないのであって、ただ残酷な死、というより極め付きの悲劇的な死、暗黒の死を迎えているのだと解釈した方が、*Light in August* は落ちつきがいいように思われるのだ。その点について他の登場人物を考慮に入れながら、考えてみよう。

(4)

度々述べたように、作品の色取りあるいは人物の織りなす色調は、“関係”の中で決まってくる。『八月の光』という作品では、ジョー・クリスマスの世界は、ゲイル・ハイタワーの世界に包まれ、更にその上を Lena Grove によって包まれるような構成になっている。そのハイタワーは、自分の観念に憑かれて黄昏の一刻だけに生きているような、半ば死んだ人物である。

これは、騒音と怒りに満ちて過激に活動するクリスマスの暗黒の人生とは、まったく相容れぬものだ。とは言え、クリスマスは最後に、元牧師の静かな暗い家へ飛び込んで行って、暴力的な死を迎える。ハイタワーの家における死を重く捉えて、これによってクリスマスは最終的に救済されているのだというふりに、読まれることが多い。⁽³⁰⁾しかし、死の直前までお互いに一度も出会ったことすらなく過して来た両者が、最後に一回だけ出会ったことに、奇跡を読み取ろうとするのも、どんなものか。ハイタワーが現役の牧師であるなら、そのような解釈もあるいは可能だろうが、周知の通り彼は共同体から疎外された、

異常な人物である。知識は豊かではあるが、人間音痴で教会を追われた男にすぎない。だとすれば、先にクリスマスの死に関して説いたとおり、彼の人生はいつまでたっても救いが無いのだ。元牧師の家に逃げ込んだことは、別の読み方をなされねばならないのだ。つまり、この家に行ったことが、何の意味も持たなかったという点を、確認する方が重要なのである。

ハイタワーの立場から見れば、この日はこの人物にとっては、特別のものであった。その夜明け前にリーナ・グローブの出産の産婆役を果たしたからだ。だから、彼は一時の「熱い勝利感のような波 (382)」に突き動かされているし、リーナの生命力に対する洞察も具わってきている (384)。ハイタワーは《生》のリズムを生き始めていたところなのだ。そのまさに同じ日に、クリスマスが《死》を持ち込んできたのである。その結果、この後のハイタワーの有様が語られる第20章では、一方で知恵と洞察に満ちてはいるものの、同時に旧態依然とも言えるような、過去の観念に憑かれた姿を呈しているのだ。つまり、ハイタワーは変わっていないのだ。「老いぼれのわしにもまだ生命はあるぞ (383)」と思えたのは一瞬のことにすぎないのだ。クリスマスの侵入は、ハイタワーの高揚した意気込みをなえさせてしまったのである。

結局《生》と《死》は、ハイタワーの目の前で、いわば一場の演技をしただけで、通り過ぎて行ってしまったのである。換言すれば、人生の最も強烈なドラマが二つ、同一の目のうちに、ハイタワーの目の前で展開した。が、それも、彼にとっては殆ど意味を持たなかった。所詮この人物は、薄暮の中でじっとしたままで、クリスマスが「どす黒い血を」噴出して過酷な人生を閉じていくのを見ているだけなのである。静と動の対照、薄暗がりと暗黒の対照（新しい批評の波間に見える言葉を使えば、対照というより、差異というのかもしれないが……そう言えば、この対照が照らし出す両者の人生の様相は、いずれ劣らぬ惨めさで、その点では、両者にはあまり大きな差異はないようだ）を見せて。

ハイタワーの目の前に展開する《生》の演技は、言うまでもなくリーナ・グローブによって示されている。彼女の存在が、クリスマスとコントラストをなす

よう意図されたことは、ファディマンの研究が最も端的に示している。⁽³¹⁾ 実際彼女は、前述の二人とは対照的に、光、愛、聖母のイメージが与えられている。このことが持つ意味については、別のところで考察したことがあるので繰り返しは避けたいが、光と闇という対照的な関係が、⁽³²⁾ クリスマスの暗黒のイメージを却って益々深めている点は、⁽³³⁾ ここでも強調しておきたい。

さらにもう一点留意したいのは、リーナが単なるコントラストとしての存在の域を超えているということである。つまり、彼女がジェファスンの共同体にやって来て去るまでの間に、この町のよそ者たちが一掃されているということである。丁度光が闇を一掃するように。こうしてみると、リーナは、共同体から異質なものを排除し、そこを“浄化”する役も果しているのだ。だ、一方クリスマスにしてみれば、その光ゆえに闇の存在である彼の留まる場所が、無くなってしまおうということだ。闇は光によって、駆り立てられ、消し去られていくのである。

『八月の光』を外側から包む、リーナの観点から見れば、この作品は光と祝祭的なよろこびに覆われている。⁽³⁴⁾ しかし、クリスマスの存在に限って言えば、悲劇的な暗黒以外の何ものもない。彼の幼児期、青春期、青年期は、おおいがたい絶望感に満ちたものだった。さらにジェファスンの町での数年間も、暗黒の人生の上に、また黒々と上塗りをするだけであった。そして、この作品の見事なところは、彼の死の当日が、それを最も象徴的に示すものとなっている点である。即ち、彼の人生が、元牧師ハイタワーとの関係においても、光の精あるいは聖母リーナとの関係においても、結局は救済が得られないということが、示されているという点において。

[Notes]

- (1) R. K. Fadiman, *Faulkner's "Light in August": A Description and Interpretation of the Revisions* (U. of Virginia P., 1975)
- (2) *Ibid.*, pp. 24—30, フォークナーがこの作品の執筆を開始した1931年8月17日から、この年の11—12月の New York 訪問の頃までは、このような構成になっていたようだ。Cf. D. Minter, *William Faulkner: His Life and Work* (Johns & Hopkins U. P., 1980), pp. 132—3.

- (3) R. K. Fadiman, *op. cit.*, p. 24, p. 42.
- (4) テクストは *Light in August* (photographed from a copy of the first printing: Random House, 1967) による。
- (5) これらのテーマは、C. Brooks が *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (Yale U. P., 1963) の Preface で記したもの (p. viii.)。ただ、そこには人種問題というテーマだけは言及されていない……
- (6) R. K. Fadiman, *op. cit.*, pp. 93—100.
- (7) *op. cit.*, p. 83, p. 91.
- (8) たとえば、*The Sound and the Fury* の Quentin が、妹の結婚式の40日後に自殺したのも、単に偶然とは言えない Ars Moriendi があるのではないか。クリスマスとキリストの関連については、諸家の指摘が、たとえば、彼の最後の週間を Holy week と解した F. Pitavy, *Faulkner's "Light in August"* (Indiana U. P., 1973), pp. 77—8 などには、示唆されるところが多い。
- (9) H. Hungerford, "Past and Present in *Light in August*", *American Literature* (1983, May), pp. 183—198.
- (10) このあたりは、テクストでは17才 (157) とされているように、年令の矛盾やバラツキが散見される。cf. R. K. Fadiman, *op. cit.*, pp. 96—8.
- (11) R. K. Fadiman, *op. cit.*, pp. 98—9.
- (12) *ibid.*, p. 98.
- (13) R. D. Parker, *Faulkner and the Novelistic Imagination* (U. of Illinois P., 1985), pp. 93—4.
- (14) "Dry September" も、こういった殺し文句に豊んだ作品だ。たとえば、"Do you claim that anything excuses a nigger attacking a white woman? Do you mean to tell me you are a white man and you'll stand for it? You better go back North..." だとか、 "...are you going to sit there and let a black son rape a white woman on the streets of Jefferson?" といった Mc Lenden (こういった名前を持った民族の、俗に言われている特性と、作中のこの人物像を考え合わせると大変面白い) の言葉は、代表的な好例である。
- (15) 丸谷才一「男泣きについての文学論」、『みみづくの夢』(中央公論社、1985) 所収。
- (16) H. M. Ruppensburg, *Voice and Eye in Faulkner's Fiction* (U. of Georgia P., 1983) pp. 30—48. なお "Internally Translated" narrative については、cf. pp. 37—39.
- (17) *ibid.*, p. 43.
- (18) A. F. Kinney, *Faulkner's Narrative Poetics: Style as Vision* (U. of Massachusetts P.), p. 23.
- (19) このことを R. D. Parker は、"deliberately withheld meaning" と称して、別の解釈をしている。cf. *op. cit.*, pp. 3—4.

- (20) R. K. Fadiman *op. cit.*, p. 105.
- (21) たとえば D. Minter, *op. cit.*, p. 20. F. Pitavy, *op. cit.*, p. 97. D. Williams, *Faulkner's Women: The Myth and the Muse* (McGill-Queen's U. P., 1977), p. 180.
- (22) この年令の特定に関しては, cf. H. Hungerford, *op. cit.*, p. 189.
- (23) R. B. Parker, *Promised Land* (1976), §21.
- (24) G. L. Mortimer, *Faulkner's Rhetoric of Ross: A Study in Perception and Meaning* (U. of Texas P., 1983), p. 17.
- (25) H. M. Ruppensburg, *op. cit.*, p. 35.
- (26) 「リンチ」ではなく, 暗殺であるとか自殺であるという説明をする研究者もある。cf. C. Brooks, *op. cit.*, p. 151., M. Backman, *Faulkner: The Major Years* (Indiana U. P., 1966), p. 86.
- (27) この年令の特定についても cf. H. Hungerford, *op. cit.*, pp. 190—2, 彼がバーデンの家に居た期間が2年半~4年半であるということについては, cf. Fadiman *op. cit.*, pp. 175—6.
- (28) たとえば, O. Vickery, *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation* (Louisiana State U. P., 1959), p. 73. H. H. Waggoner, *William Faulkner: From Jefferson to the World* (U. of Kentucky P., 1959), p. 107.
- (29) M. Millgate, *Achievement of William Faulkner* (Constable, 1966), p. 134. F. Pitavy, *op. cit.*, p. 77.
- (30) たとえば F. Pitavy, *op. cit.*, p. 140.
- (31) R. K. Fadiman, *op. cit.*, pp. 153—7.
- (32) cf. 拙稿「リーナ・グローヴとフォークナーの女」, 『マグノリア』第1号 (明治大学「マグノリアの会」, 1986) 所収。
- (33) リーナが作品の全体を包む枠組となり, ことにクリスマスに対するアイロニ的存在になっているという読み方は, 昔も今も, よくなされている。E. J. Sandquist, *Faulkner: The House Divided* (Johns Hopkins U. P., 1983) p. 75.
- (34) このことについても cf. note (32).